

くまにち 論壇



国連事務次長・
軍縮担当上級代表

中満 泉

なかみつ・いずみ 89年国連入りし、難民、人道支援や安全保障に従事。著書「危機の現場に立つ」。ニューヨーク市在住。58歳。

2022年はオミクロン株の急激な感染拡大で、再び困難な状況での年明けとなってしまった。国連で私が担当する軍縮分野でも、1月4日から4週間開催される予定であった核兵器不拡散条約（NPT）運用検討会議が直前に再び延期となり、年末年始はその対応に追われるあわただしいものになった。準備を重ねてきただけに残念でならないが、できるだけ早い時期に開催できるようなさまざまなオプションを探っているところだ。

コロナ禍が世界にもたらした影響に、壮絶な貧富の格差拡大がある。国際的人道支援組織オックスファムが毎年世界経済フォーラム年次総会（通称ダボス会議）にあわせて公表する経済格差に関する報告書が今年も1月17日に発表された。

それによれば、コロナ禍中の20年3月から21年11月の間に、世界で最も裕福な富豪10人の資産は7千億ドルから1・5兆ドルに倍増したという。同時に、世界人口の99%の人々の収入は減少、1億6千万人が貧困に陥り、飢餓や必要な医療を受けられずに毎日2万1千人が命を落としている。特に女性やマイノリティーなど社会的に脆弱な立場にいる人々が大きな影響を受けている。

新型コロナ

国連の限界と「新しい冒険」

オックスファム報告書はこのような格差と不平等を「経済的な暴力」と呼び、これらは偶然生み出されたものではなく少数の特権層に有利な経済構造と政策の結果だと指摘している。祖国日本からも、コロナ禍で困窮する人々のニュースを度々目にするようになった。

格差問題以外でも、待たなしの気候危機、世界の分断をもたらしかねない大国間の緊張関係と増加を続ける紛争や軍事クーデター、深刻度を増す暴力や人権侵害、規範の整備を待たずに加速度的に進むテクノロジーの進化など、私たちの未来を大きく左右する問題が山積している。

これまでいつも未来に楽観的だった私が、常に心配を抱えているように胸が重くなるのを感じている。同時に、今、国連に求められる役割とは何かを考えている。

グテレス事務総長が去年9月に発表した「私たち共通の課題」にあるように、これらの難しい課題はどれも解決が不可能なものではない。国際社会と人々が連帯し協力し行動すれば、克服が可能だ。克服するために何をすればよいのかも、大体わかっている。

しかし国連は強制力や大きな権限をもつ世界政府では到底なく、危機

にあっても自らの（短期的な）「利益」を競争相手よりも伸張せんとする主権国家たちの間を取り持ち、対話を促し、共通項を探り、政策オプションを提言する。そんな努力を舞台裏で積み重ねるのが私たちの役割のようだ。

私の尊敬するハマーシヨルド事務総長（在任1951〜61年）が「国連は私たちを天国に導くためにはなく、私たちを地獄から救うために創設された」と述べたのは有名だが、彼は1956年にニューヨーク大学での講演で次のようにも述べている。

「私たちは依然として、自分たちの国際機関がウッドロー・ウィルソンの言う『国々の目となって、共通の利益を見守る』という根本的な目的を実現するための方法を模索しているところですよ。40年経っても同じ目的を追求していることですよ。」

世界的な機関は、人類史上の新しい冒険なのです。これを完成させるためには、苦い経験を多く積み重ねる必要があります。そのためには、時間をかける以外の方策はありません」

ハマーシヨルドは、ぶれることのない強固な信念と理想をもった人であったが、同時に世界の現実と国連の限界を理解していたリアリストでもあった。過酷な現実の中でどう理想に近づいていくかを、常に考えていた人なのだろう。

40年どころか66年経ってしまったが、世界が転換期にある今、私たちの日々の格闘はそういうことなのだろう。そして、「人類史上の新しい冒険」に関われるとは、なんと幸せなことだろうか。明確な答えは歴史の中に委ねるとしても、重要な節目では目に見える成果を出せるような、そんな冒険にしたいと強く思う。